

週日の説教

金 大烈 神父 2009年12月8日(火)

《わたしは、あなたのはしため》

今日の第一朗読(創世記 3・9 15、20)は創世記の物語でした。原罪を犯したアダムとエバの物語が紹介されています。一つの常識として、創世記について、話をしておきます。

すでに何回も申しあげましたが、創世記のことを伝説のような話、『説話』と言います。もともとある話ではなくて、その時代に住んでいたイスラエル人が、「なぜこのようなことが起こるのか」「このことをどのように理解すればよいのか」といろいろ考え、反省して、歴史のように書いたものです。それは、歴史をさかのぼって反省しています。歴史というのは、ふつうは古い時代から始まって、新しい時代へと流れていきます。しかし、その時代のイスラエル人達は、自分達の現実を他の人々へ理解させるために、歴史をさかのぼって書いたのです。それが、創世記です。

例えば、『人間はなぜ、いつも自分のせいではなくて、他人のせいにするのか。なぜいつも言い訳をするのか。なぜ人間は家族さえ殺すことができるのか。なぜ人間だけが裸を恥ずかしているのか。男より女は腕力が弱いのか等』それに答えるために考えられたのが、今日の第一朗読にも出てくる話ですね。

裸であることに気づいたアダムは、神様の声が聞こえたので隠れます。神様は、「アダム。アダム。どこにいるのか。」と呼びかけます。そこでアダムは、「あなたの言葉が聞こえたので、恐れて隠れています。私は裸ですから。」と答えます。神様は、「あなたが裸であることを誰が教えたのか。食べてはいけないと言っておいた木の実を食べたのか。」と言います。するとアダムは、「あなたが一緒にいるようにしてくださった女の人に誘われて、このりんごを食べてしまいました。」と言い訳をします。そこで神様は、エバに聞きます。「なぜ誘ったのか。」と。エバは、「あの蛇が、私をそそのかしたのです。」と答えます。女性は昔から蛇が嫌いだったようです。『なぜ男の人より女の人が蛇を怖がるのか。』その答えもこの創世記に簡単に入れたのです。

そしてその後、二人はエデンの園から追い出されて、働きます。一生懸命に働いて子どもが産まれます。子どもの名前は、カインとアベルです。カインはアベルを、ただねたみという感情だけで殺してしまいます。『人間は、なぜねたみを持たなければならないのか。なぜ同じ家族の間でも殺すことができるのか。』このような疑問に答えを得るために書かれたのが、この創世記なのです。

今日は、無限罪でお生まれになったマリア様を祝う日です。だから、この原罪の物語が紹介されているのです。

さあ、今日の福音(ルカ 1・26 38)に入ってみましょう。今日は、無限罪のマリア様の祝日ですが、いつ頃からこのように祝うようになったのでしょうか。初代教会、初めの共同体の中でも、「マリア様は、私たちの救い主である神様の子をお産みになった方で、もともとけがれがなく、原罪という罪に影響されない。」と思われていました。しかしそれは、「民間信仰」というものでした。それから時間が経って1854年12月8日、教皇ピオ10世が回勅(教皇様が司教や司祭に述べ伝える手紙)を頒布します。今まで民間信仰として信じてきた、「マリア様は無限罪である」という信仰を教会の名によって

正式に定めます、という手紙でした。それを全世界の教会に頒布したのです。その教皇様の教えに従うことで、私たちは「無限罪のマリア様」を信仰として受け入れたのです。

その4年後、フランスのルルドというところで、ベルナデッタという女の子にマリア様が出現されました。その時初めて、マリア様の口から「私は無限罪のマリアです。」という言葉が出されたのです。それ以来、マリア様は出現される度に、「私は無限罪のマリアです。」とよくおっしゃっています。カトリック教会は、このようにして無限罪のマリア様を信仰として受け入れています。それを、皆様と一緒に考えたいと思いました。

さあ、福音の中身に入りましょう。‘アメリカの鉄鋼の王’と言われる‘カーネギー (Andrew Carnegie)’という人がいました。ある新聞記者が彼を訪ね、少し遠慮しながら質問をしました。「もし、この会社が倒産したらどうしますか。」と。彼はその時、少しも迷わずに「また建て直せばよいではないか。」と答えました。彼の言葉とともに、今日の福音について考えたことは、「人間は失敗をしながら生きているのに、失敗を恐れている。」ということです。私たちは、罪という失敗、そのほかいろいろな失敗をしながら生きています。しかし、失敗をしているからこそ、私たちには発展の可能性があるのです。

今日の福音でもいろいろ恐れがありました。マリア様の前に天使ガブリエルが現れ「あなたは、身ごもることになる。」と言います。でもマリア様は「私は男の人を知らないのに、そのようなことがありますでしょうか。」と尋ねます。ガブリエルは、「神様にできないことは何もない。」と答えます。次にマリア様がおっしゃったのは、「私は主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」という言葉でした。たぶん彼女は、いろいろとまどったと思います。そして、とても怖かったと思います。恐れがあったと思います。しかし彼女は、失敗の可能性、だまされる可能性、いろいろなことを考えても「私はあなたのはしためです。」という告白ができたのです。そして、その信仰があったから、イエス様が私たちのところへ来ることができたのです。そのことを、私たちは考えなければならないと思います。

皆様、「私はあなたの僕です。」「私はあなたのはしためです。」という言葉は、一番きれいな表現です。何の迷いがあっても神様は私に一番良い道に導いて下ると信頼感を持って進むべきだと思います。このような祈りができれば、人間的な迷いやぶつかりあいが、本当につまらないことであると分かるのではないのでしょうか。私たちが、本当に心を痛めるべきことは何なのか、本当に喜ばなければならないことは何なのか。それらを考える基準は信仰であることを、今日の福音をとおして、とくに無限罪のマリア様の模範を思い出しながら考えてみました。

ありがとうございました。

今日の福音(マタイ 9・35～10・1,5a,6 8)では、イエス様が弟子たちを派遣しましたことが話されています。イエス様は、あちこちでいろいろな仕事をなさり、弟子達にも同じことをするように、とお

っしかったです。そして、「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」とおっしゃいました。

さあ、『収穫』とは何でしょうか。収穫とは、「働いて得られる実り」のことですね。教会の歴史を見ますと、収穫を得ることに焦点を絞って、たくさんの人をカトリック信者にしようとしたことがありました。南米の国では、政治的な欲のために宣教の名を利用しました。ヨーロッパのカトリック信者は、神様のみ言葉を伝えることだから福音的なことだと思い、一緒に活動しました。一緒に活動したと言うより、活動させられていたのです。その結果、今では南米のほとんどの国がカトリックの国になっています。しかし、その過程、プロセスの中には、いろいろな傷みがあったのは確かです。

では、皆様に質問をします。教会の視点では、量が大切なのでしょうか、それとも質が大切なのでしょうか。質が大切だと思いますか。しかし、量の多い中から良質のものもできるのです。ということは、これはバランスがとても大事だということです。まず宣教の初めは、量を集めるために頑張らなければなりません。しかし、量を集めようとする人々の質が大事です。きちんと準備のできている人が、たくさん量を集めることができます。その中から、可能性のある、良質のものが出るわけです。

では、カトリック信仰の立場から考えると『良質』というのはどういうことでしょうか。どのような信者を良質の信者というのでしょうか。理解してください。良質の信者というのは、喜びで生きる信仰者です。何があっても喜びで生きる信仰者です。信仰、信仰 と言いながら、悲しみばかり、心配ばかりならば、それは良い信者ではありません。良い信者ならば、どんな立場でも、どんな条件でも、いつも希望があるのです。イエス様という希望があるから、いつも喜びで何とか頑張ろうとするのです。

今日の福音を通して、『収穫』という単語から『希望』まで話しましたが、皆様にお願ひがあります。何があっても、どんな恐れがあっても、キリストという希望によって生じる喜びとともにいることをいつも心に刻んでください。

ありがとうございました。